

080917 第6回幼児のコモンセンス知識研究会(SIG-ICK)(玉川大)

「言葉の習得とコモンセンス」

岩垣 守彦

●「ことば」に関して

○生得能力(生命維持のための) 集合力
想像力 命名力

犬の集合イメージ 子猫とミルク(皿)

符牒 ワンワン tou-tou woof-woof

○胎内で 聴覚

母語の音素配列
音響特性

同調する分泌量・リズム

○誕生して 視覚中心＋聴覚・その他
情動(不足・充足)
不快・快→感情(R. Pluchikの8感情)
↓
音声化→(不足→懸念→充足の順)
↓ 「ない」不足(否定)→「あるか？」
懸念(疑問)→「あった」充足(肯定)
↓
「存在主体の認識」(→動作・状態主語の認識)

R. Pluchikの人間にも動物にも共通する8感情

「ない」(驚き・悲しみ・怒り・嫌悪)

「あるか？」(期待・恐れ)

「あった」(喜び・受容)



現実の経験→感情の「集合イメージ」化→「符
牒」化

↓

単語の習得 = 集合イメージ → 命名 → 符牒

↓

「アーア」 → 学習

同音反復 (主体 + 動作・状態 → 事象)

↓

Sit! / Sit down.

↓

ワンワンが歩いている (主体 + 動作)

↓

歩いているワンワン (動作 + 主体)

↓

視覚認識語 (物名詞)

+

(現実的学習 →) 感覚情報

視覚認識語(物名詞)

＋感覚情報「(形・色・音・感触・味・香り, その
他)＋時＋場」

○知恵熱(6ヶ月～1年)→感覚の不統合 cf. teething fever

非視覚認識語(事名詞)の獲得



談話・絵本・童話・現実

○お話(3～5歳)→事象(名詞+動詞)+事象



情動の発露————→感情

(名詞・動詞の選択————→形容詞・副詞)



感覚の統合→現実感覚

cf. sense of proportion

William James「悲しいから泣くのではない。泣くから悲しいのだ」

事象

感覚情報

秋の夜

暗い, 冷たい, 寒い

旅の男

寂しい

針仕事(男の不得意な仕事)

秋の夜や 旅の男の 針仕事 (一茶)

→侘びしい

名詞(事象)に含まれている感覚情報から新しい感情が喚起される

●コモンセンス(現実感覚)について

ギリシヤ (koinē aísthēsis→sēnsus commūnis)

英語 common sense

フランス語 sens commun

日本語 「常識」

中村雄二郎はデカルトの sens commun(サンス・コマン)を「アリストテレスの、五感を貫き総合するもの」ととらえて「共通感覚」(『共通感覚論』(岩波現代選書, 1979/05))

「現実感覚」

「現実のことに大多数の人が共有する実践的
判断・行動規範」(常識＝知識)ではなく、
「個々別々であるが、結果的に同じとなる(五
感を貫き総合した)現実への対処感覚」(知
恵)

幼児は現実を体験しながら「現実に対する実際的な対応感覚」を身につけていく。その際、現実が異なる(＝言語風土が異なる)と「事象の組み合わせ」も「事象の比重」も異なって実際的な現実対応感覚も異なる。当然、喚起される論理・判断・感情も異なる。現実対応は一生続くが、「コモンセンス」(現実感覚)の基礎、すなわち、白い紙が真っ黒になる第一層ができるのは、5歳ごろ(脳における言語能力が完成するころ)、言い換えると、それまでの感覚情報の組み合わせ(「色の組み合わせ」「音の組み合わせ」「言葉の組み合わせ」などの学習(親・先生・仲間・大人, など))から「主観的判断形容詞」が出てくるころではないかと思われる。